

直筆の満洲語書簡が語る康熙帝の真実

岡田英弘著
康熙帝の手紙（清朝史叢書）



四六判 472頁
藤原書店
[3990円]

澁谷 浩一

待望の復刊である。岡田英弘著『康熙帝の手紙』が中公新書の一冊として世に出たのは一九七九年のことであるが、その後長く絶版となっていた。今回、藤原書店の新シリーズ「清朝史叢書」の劈頭を飾る一冊として三十三年ぶりに復刊の運びとなったことをまずは喜びたい。

「発刊の辞」及び「はじめに」によれば、岡田氏編『清朝とは何か』（別冊『環』⑩、藤原書店、二〇〇九）の成功を契機に、同書のコンセプト——漢字以外の史料を幅広く利用した世界的視点からの清朝研究によつて従来の中国史を再考する——を受け継ぐ形で、岡田氏監修のもと同書にかかわったメンバーにより新たな叢書が企画されるに至ったという。その際、叢書の第一冊として推されたのが新書版『康熙帝の手紙』の復刊だった。高齢を理由に改訂作業を渋る岡田氏に叢書研究

会のメンバーが協力を申し出、ここに面目を一新する形で名著は復刊された。本書は、日付のずれ及び一部用語の修正以外、新書版の本文そのものにはほとんど手は加えられていないが、一方で大幅な増補が行われている。以下に新書版との相違も含めて本書の概要を紹介したい。

本書の主題は、一七世紀末の清朝康熙帝とジュンガルのガルダンとの戦いである。西モンゴルオイラト諸部の一つであるジュンガルを率いるガルダンは北モンゴルのハルハに武力侵攻を行い、壊滅状態に陥ったハルハの人々は康熙帝に助けを求めた。北京の北三〇〇キロまで侵入したガルダンとの初めての衝突（ウラン・ブトンの戦い、一六九〇年）の翌年、康熙帝はドロン・ノールの地でハルハの王侯達に臣従を誓わせる儀式（会盟）を行い、ガルダンの手から北モンゴルの地

を奪還する決意を固めた。こうして、一六九六年から翌九七年にかけて、康熙帝は長城外のモンゴル高原へ三度にわたって親征を敢行することになる。

新書版では、親征についての具体的記述の前に、両者の対立の背景を理解するうえで欠かせないチベットの動向を含めた北アジア情勢について概説する一章「中国の名君と草原の英雄」が設けられていた。ガルダンには実はチベットの高僧の転生者で、かつてチベットでダライ・ラマ五世に師事したことがあった。チベット仏教の影響力はモンゴル全域に及んでいたのである。本書ではこの新書版序章の前に「清朝とは何か」と題する新たな序章が置かれた。これは上述の『清朝とは何か』に掲載された岡田氏の文章の再録で、モンゴル帝国以後のユーラシア世界史の流れの中に清朝を位置付ける内容となっている。「中国」を超えた視点で清朝を捉えようとする「清朝史叢書」そのものの序章として読むことができよう。

新書版の最大の価値は、三度の親征の経過を、康熙帝が行軍の最前線から北京にあてて送った直筆の満洲語書簡を最大限に利用しながら描いた点にあり、これは本書にもそのまま引き継がれている。岡田氏は、一九五七年に『満文老檔』の研究で学士院賞を受賞し、その後同賞の受賞メンバーである神田信夫、松村潤の両氏とともに関連史料の調査のために台

湾を訪れ、そこで朱筆による手紙の「小山」を実見したのだという。その後同史料が台湾から『宮中檔康熙朝奏摺』に収められて正式に出版されるのを待って新書版が世に出た。

本書には、本文の後に「補」として本文の内容と関連する岡田氏自身の既発表学術論文六編が再録されている（英文論文の和訳掲載を含む）。各論考はいずれも興味深い内容だが、中でも第一論文「モンゴル親征時の聖祖の満文書簡」は、『宮中檔康熙朝奏摺』所収史料の日付・配列の矛盾について指摘したもので、本文の叙述の基礎となる重要な研究である。本書では、同書からの引用史料にはすべて出典が明記されており、また、同書以外の史料によった部分にも適宜典拠が示されている。以上の新書版からの増補改訂部分は本書の学術的価値を大きく高めているが、本文における新書版との相違でそれ以上に目を引くのが全編にわたって付された計一九五の「側注」の存在である。一般にはなじみの薄い固有名詞が頻出する本書には、いちいちページを繰る必要のない「側注」形式は最適であろう。そして注に関しては形式のみならず、その内容にも注目したい。「あとがき」によれば、注の作成は杉山清彦、宮脇淳子、池尻陽子、渡辺純成の諸氏が中心になったという。家系や人間関係にまで言及する人物説明には最新の研究成果が垣間見える。官庁・役職名の説明について

もありきたりの内容ではなく、たとえば理藩院について、モンゴルの王侯達にとっては「世話係・儀典係のようなものである」（八九頁）といった本質を突く記述が見られる。ガルダンの嫂との結婚についてのくだりにはレヴィレット婚についての適切な解説もある（八三頁）。全体として痒いところに手が届く注釈になっていると言えよう。康熙帝が行軍の途上で目にした多数の植物の学名比定も画期的なものかと思われる。

さらに、本書の最後には「史料」として本文の内容を補完する新出の重要満洲語史料の和訳及び解題（楠木賢道、鈴木真、岩田啓介の諸氏による）が掲載されており、一段の専門性を求める読者の要望にも応える配慮がなされている。その他、本書全体を通じての地図や系図、図版並びに索引の充実ぶりも特筆に値しよう。

話がやや形式面に偏ってしまった。手紙の内容に話をもとそう。康熙帝の手紙は、遠征途上から北京で皇帝の代理として政務を取り仕切る皇太子にあてて送られたものである。内容的に軍事作戦の経過報告が中心となっていることは当然であるが、後継者として期待する息子への私信としての性格も有するが故に、作戦の進行・見通しについての不安や喜び、時には怒りといった率直な心情が吐露されており、また、北京の宮廷への思いやりにあふれた文面となっているのが印象

的である。時に陣中への贈り物等のきわめて細かい点にも話は及ぶ。これらの手紙は、清朝の公式編纂史料の材料ともなった訳だが、本書では、編纂史料からたどることのできる事実経過を踏まえながら、あくまでも親子の間でやりとりされた手紙の内容を軸にこの大事件の顛末が描かれる。

三度の親征のうち、最も困難かつ劇的な展開を見せたのは、第一回のそれである（一六九六年四月～七月）。ガルダンが本営を置くケルレン川上流を目指した三路の清軍のうち、三万七千の中路軍を率いた康熙帝は、「ゴビ沙漠を越えて」との章タイトル通り、ゴビ沙漠のほぼ中央を北へ向かって進軍したが、その途上で東路軍の遅延・脱落を知る。その後西路軍との連携も困難を極め、一時は敵地のまった中に孤立してしまうのである。著者は、康熙帝が直面していた現実と手紙の文面を対比させ、困難の中で揺れ動く皇帝の心情を鮮やかに描写していく。結局最終的にはガルダンは皇帝親征の報を聞いて逃走し、將軍フィヤンク率いる西路軍とジョン・モドの地で激突、清側の大勝利となって最初の親征は終了する。

逃げ延びたガルダンに対してその後も二度の親征が行われた。ガルダンの南進に備えて南モンゴルのココ・ホトン（フヘ・ホト）を目指した第二回の親征（一六九六年一〇月～一六九七年

一月)は、「狩猟絵巻」と題された章タイトルからもうかがえるように、南モンゴル及びオールドスの草原で狩猟を楽しみながらの行軍となった。ガルダンの動向を気にしながらも狩猟を満喫した皇帝は、仕留めた兎や雉の数まで事細かに皇太子に報告している。

続く「活仏達の運命」と題された章で描かれる第三回親征(一六九七年二月〜七月)の過程では、チベット情勢に大きな変化があった。一六八二年に死去していたにもかかわらず、遺言により、摂政サンギェギャツォによつて秘匿されていたダライ・ラマ五世の死が公になったのである。この顛末についても本書では『宮中檔康熙朝奏摺』所収の満文史料に基づき詳細に明らかにされている。このことは、ダライ・ラマの権威を背景に行動していたガルダンにとっては大きな打撃となるはずであったが、そのガルダンは同じ頃モンゴルの地で没した。そして、ガルダンとの直接接触がかなわないまま北京への帰途についていた康熙帝のもとへガルダン死去の報は伝えられた。ガルダンの死因については、「補」収録の第二論文が本文の記述を補強する。ガルダンの高僧転生者としての聖性否定と皇帝の体面救済のために、史料上で病死を服毒自殺に書き換えたという説には説得力がある。

終章では、親征を契機に成長を遂げた皇子達による権力争

い、その中で失脚していく皇太子の悲劇が描かれ、康熙帝の死、雍正帝の即位をもつて本文は閉じられる。

本書は康熙帝一代の伝記ではなく、対ガルダン戦争という限られた場面における康熙帝の姿を描いたものである。しかし、直筆の書簡に基づくが故にそこには真実の皇帝の姿がある。そして、トゥングース系の満洲語を母語とする満洲人皇帝が、チベット仏教高僧の転生者である遊牧君主とモンゴル高原を舞台に激突するその歴史展開は、通常イメージされる「中国」史の範疇を超えたものである。漢字文献に縛られた「中国」史再考を目指す「清朝史叢書」の第一巻として、本書はまことにふさわしいと言えよう。三三年の時を超えて最新の学術成果をも身にまとい復刊された本書は、今度こそ多くの読者を清朝史の世界へと誘うに違いない。

本書の復刊に関わったのは、新書版『康熙帝の手紙』はもちろんのこと近年『モンゴル帝国から大清帝国へ』(藤原書店、二〇一〇)にまとめられた岡田氏の諸研究に示唆・刺激を受けながら研究に取り組んできた研究者達である。彼ら後継研究者達の手による叢書の続刊も大いに期待したい。本叢書を通じて、清朝ひいては中国の歴史に対する一般の理解がより深まることを切に願う。

(しぶや・こういち 茨城大学)